

荘園制の解体で 崩壊する封建社会

荘園の経営で支えられていた
西ヨーロッパの封建社会

古代世界の解体後、11世紀ごろに西欧世界で最盛期を迎えた社会秩序が、封建社会であった。ゲルマン社会の従士制と古代ローマの恩貸地制が結合したとされる中世西欧の封建制では、主君は臣下に土地を与えて保護下に置き、臣下は主君に忠誠を誓い、騎士として軍務を負った。こうした主従関係は、授封された者がさらに土地の一部を従者に与えることで重層化していった。

騎士、諸侯などの封建貴族や、土地を寄進された教会などの経済的基盤は、荘園制によって支えられた。領主は所領に農奴を抱え、農奴には保有地での生産物の一部を領主に納める貢納と、領主直営地で労働を提供する賦役が課せられた。

農業の発展により荘園制が
解体し、封建領主が没落

こうした中世封建社会は、13世紀ごろから揺らぎはじめる。その原因は、傭兵や火器の普及による騎士の没落や、十字軍遠征（P74参照）などによる教皇権の失墜と王権の強化、貨幣経済の発展による都市と商人の台頭などが挙げられるが、最大の原因は封建社会を支えた荘園制の解体にあった。

12世紀ごろから、三圃制農法の普及といった農業技術の革新により、農業生産力が飛躍的に向上した。これによりできた余剰生産物は定期市などで交換されるようになり、貨幣経済を進展させる一方、農民は富を蓄えるようになった。

14世紀に入ると、ペストの流行や飢饉によりヨーロッパの人口は激減し、深刻な労働力不足に見舞われた。労働力を確保したい領主は、農民に対する支配を緩めるようになり、その結果、蓄えた富を領主に支払うなどして、農奴の支配から解放される独立自営農民が出現した。逆に、支配を強化した領主に対しては、ジャッククリーの乱やワット・タイラーの乱に代表される農民一揆が起こされた。

こうして荘園制という経済的基盤が解体されるにしたがい、封建領主たちは次第に没落の道を歩むこととなったのである。



11世紀
14世紀

騎士の没落や王権の強化などに加え、荘園制の解体により、中世西欧を支えた封建社会は崩壊へ向かうこととなる。

ヨーロッパ封建社会の崩壊過程



人と物の交流が運んだ ペストの大流行

歴史上、ペストの流行は2〜3世紀ごろからあったとされるが、14世紀のヨーロッパで起きたペスト大流行は、当時のヨーロッパ全人口の4分の1にあたる2500万人もの死者が出たとされるほどの大災害となった。1330年代に中央アジアで発生したペストは、1347年には黒海沿岸のクリミア半島に達していた。そして、同年10月ごろには遠く離れたシチリア島で発生が確認され、以後53年ごろまで、ヨーロッパを北上するようにペストの流行が広がった。黒海に進出していたジェノヴァの貿易船がペストの宿主であるネズミを運んだことが原因とみられている。

ヨーロッパではその後も断続的に流行が続き、15世紀末まで、減少した人口が回復することはなかった。

ペストの拡大



Key Word

のうど
農奴

中世ヨーロッパでは、領主などの権力者が農民を保有し、貢納や賦役を課することで荘園経営を行っていた。農民には移住の自由がなく、領主から結婚税、死亡税などを徴収され、裁判権も領主が独占していた。家や家族をもちながらも、こうしたぎわめて不自由な身分に置かれていたため、農奴とよばれる。